日本と「月」

――日中比較文化論――

水野久子

はじめに

塵埃のように、集合しては消滅し、消滅しては儚い追憶に変化を遂げる私達を、包み込んでくれる夜空。中でも、「月」は、あまりにも自由で、心憎いほど美しい。永遠に静止することのない時間の流れに、押し流され、有限たる命に、儚さと焦りを感じる私には、澄みきった月の表情が、ただただ美しく思えた。それ故、生活に、文化に溶け込んだ「月」の存在と、古の人々の心をつかんだ「月」の魅力を紐解いてみたいと思った。日本では、どのように詠まれ、愛されてきたのか、調べてみたい。

本稿では、数多くの月の詩歌の中から、望郷の心を月に詠み込んだ日本と中国の詩歌に注目した。中国で詠まれる望郷の月は、別離後の人間達を仲介し、遠く離れた人間同士を結びつける役割を担う。恐らく、このような発想は、日本には無く、根付かなかった意識であろう。望郷の月を、万葉集からはじまって、八代集にいたるまで、時代を追って分析し、日中の美意識を比較、検討していきたい。

一　漢詩における「月」

唐代の詩歌を見ていると、「月」に関する歌は、全体の約一割を占め、日常の生活に密着した情緒ある美の景物として多様に詠まれている。先述したように、本稿では、数ある「月」の詩歌の中から、特に旅愁や望郷の念を「月」に託した詩歌に注目したい。中国で詠まれる望郷の「月」は、別離後の人間同士の心を仲介して一つにする役割を持つ。「月」＝ふるさと、家族、想う人を想像させる媒体であるのだ。代表的な詩を幾つかあげたい。

今夜鄜州月　閨中只獨看（今夜鄜州の月　閨中只だ独り看ん）
遥憐小兒女　未解憶長安（遥かに憐れむ小児女の　未だ長安を憶うを解せざるを）
香霧雲鬟濕　清輝玉臂（香霧に雲鬟湿い　清輝に玉臂寒からん）
何時倚虚幌　雙照淚痕乾（何れの時か虚幌に倚り　双び照らされて涙痕乾かん）

この歌は、杜甫の作で、「今夜、鄜州の空にもかかっているのであろうこの月を、鄜州にいる妻は部屋の中で只独りながめているであろう。幼い子供たちはまだ長安に捕らわれの身となっている父のことを偲ぶすべさえ知らずにいるのを遥かにいとおしく思いやる。妻の美しい髪は夜霧にしっとりとぬれ、冴えわたる月の光に妻の腕は玉のように冷たく光っていることであろう。一体何時になったら、人気のないとばりに寄り添いながら、私と妻と二人で並んで月光に涙のあとを、乾かすことができるのであろうか。」[1] という意になろう。軟禁されていた時、鄜州に疎開させていた妻子を思いやった歌である。

「鄜州の空にもかかっているのであろうこの月を、鄜州にいる妻は部屋の中で只独りながめているであろう。」という、月を介して遠く離れた人間と人間が結ばれるという発想が、中国的な望郷思想である。切なく、儚く、美しく詠まれる旅愁や望郷の「月」は、空間を越え、時間を超越し、愛する風景、愛する人をつなぐ役割を果たすのである。「月」そのものの、美しさが言葉に染み込み、身体に染み込み、押し止めることのできない熱い想いが、時空を越境して両者を耀映させるのだと思う。

静夜思　李白

牀前看月光（牀前　月光を看る）
疑是地上霜（疑ふらくは是れ　地上の霜かと）
擧頭看山月（頭を挙げて　山月を望み）
低頭思故郷（頭を低れて　故郷を思う）

（訳）寝台のあたりに差し込む月の光をじっと見つめる、そのさやかな色は、まるで霜が降ったよう。その光を求め、山の端の月を望み見る、そして、顔を伏せては、故郷を懐かしく思い出す。[2]

「思故郷」は、「はなれている故郷を懐かしく思い出す」意であるが、皆川淇園『虚字解』には、「思」は「心を離さぬことなり、搜し思ふなり」とある。月を望み見たあと、月を媒介に故郷の人が、恐らくは私と同様に月を見ているに違いないと悟り、さらに故郷が懐かしく思えて、自然と顔がうなだれてしまうという意である。

中国における「月」の歌は、望郷の「月」以外にも検討するに余

りあるものであり、多様な詠まれ方がされている。満ち欠けする「月」に不老不死を重ね、憧れと失望を同時に感じて歌い上げる詩歌から、身近な存在である月と、遥かな尊き存在である月の狭間に揺れ動く人間の心の鎖愁を感じる。また、神仙思想を取り入れた「月」の歌から、届くこと無い、隔たれた「月」に完敗し、わが身の脆さを痛感するに至った寂しさをも感じる。幾重にも編まれる「月」の歌は、僅かな切れ端に、寂寥感を滲ませていた。私は、この寂しさこそが、旅愁、望郷の月を数多く生み出した所以だと考える。「月」が天空に上ると距離を超え、時間を超えて、両者、あるいは両地を結びつける役割を持つ「月」に、人々は、儚さを悟った上で、今も昔も変わらぬ、消え失せない月を、自分の生き方に照らし合わせたのではないだろうか。古を知る月だからこそ、その光は、心にやさしく響き、さらには、想う人の心にもたどり着くものと信じたのではないかと考える。

二　和歌における「月」

では、日本において、望郷の「月」は、どのように詠まれ、受け止められていたのであろうか。また、中国的な発想である、別離後の両者の心を仲介して一つにする役割を持つ「月」の歌はあるのであろうか。『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』を、一首ずつ数え上げた結果、誤差はあると思うが、『万葉集』では、四首『古今和歌集』では一首、『新古今和歌集』においては四首、望郷の心を詠んだ歌を見出しえた。以下、和歌の解釈については、澤潟久孝『万葉集注釈』、伊藤博『万葉集釈注』、竹岡正夫『古今和歌集全釈』、久保田淳『新古今和歌集全評釈』を参考にした。[3]

『万葉集』

①旅にあれば夜中をさして照る月の高島山に隠らく惜しも　（一六九一）

（訳）家が恋しい旅の身空とて、真夜中に向けてひとしお明るく照り渡る月が、高島の山に隠れてしまうのは残念でたまらない。

②朝月の日向の山に月立てり見ゆ遠妻を持ちたる人し見つつ偲はむ　（一二九四）

（訳）月が改まって日向の山に新月が立ち昇っている。遠く離れた妻を待っている人は、この月を見ながらさぞかしはるかな思いを寄せていることであろう。

③遠き妹が振りさけ見つつ偲ふらむこの月の面に雲のたなびき　（二四六〇）

（訳）遠く離れているあの子が、はるかに仰ぎ見ては、私を偲ん

でいるに違いない月、月の面に、雲よたなびかないでくれ。

④ぬばたまの夜渡る月を幾夜経と数みつつ妹は我れ待つらむぞ

（四〇七二）

（訳）ぬばたまの夜空を渡っていく月、この月を眺めながら、もう幾夜を経たかと折り数えながら、いとしい人は、今私を待っていることであろう。

『古今和歌集』

⑤天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも

（羇旅・四〇六・安倍仲麿）

（訳）一面に広がった空を遥かに見渡せば、見事な月が上っている。あのふるさとの三笠の山に出た月と同じであるよ。

『新古今和歌集』

旅の歌とてよめる

⑥もろともに出でにし空こそ忘られぬ都の山の有明の月

（羇旅・九三六・摂政太政大臣）

（訳）もろともに出た空、即ち月は空に、我は都を出て旅の空に向かった時の、あわれさの忘れられないことであるよ。あの都の山の上に出た有明の月よ。

⑦月見ばと契りおきてし故里の人もや今宵袖濡らすらむ

（羇旅・九三八・西行法師）

（訳）月を見たらば思おうと約束をしておいたところのふるさとの人も、我と同じ様に、今宵の月を見て、我を思って涙に袖を濡らすだろうか。

⑧故里の今日の面影誘ひ来と月にぞ契る小夜の中山

（羇旅・九四〇・藤原雅経）

（訳）ふるさとの人の、遠くまた見られない今日の面影を、その面に誘い来て見せよと、月に頼むことである。この草枕をする今夜の小夜の中山で。

⑨影宿す露のみ繁くなりはてて草にやつるる故里の月

（雑中・一六六六・藤原雅経）

（訳）光りを宿す草の上の露だけが、繁きさまと変わり果てて、その草の上に光り衰えて見える故里の月よ。

『万葉集』の望郷の月歌は、「月」に事寄せて、恋慕を詠んだ歌と見て取ることができると思う。『万葉集』では、もともと、四五〇〇首あるなかで、月を詠んだ歌は、数えた範囲では、一七四首と少なく、さらに、望郷の心を月によって表現することは、稀だったようである。中国的な望郷思想は、一六九一番の家郷の妻と同じ月を

眺めているのだという、連帯感が絶たれるのを惜しむ歌が、最も近い意味合いではなかろうか。しかし、この歌は、直前一六九〇番の、

高島の安雲川波は騒げども我れは家思ふ宿り悲しみ

（訳）高島の安雲川の波は音高く逆巻いているけれども、私はひたすら家のことばかり思っている。旅の宿りが悲しくて

という歌をうけての表現となっていることから、月そのものを愛で、家族を思い出した意にはならないと考える。つまり、「夜中をさして」という言葉から、月が小夜を目指して刻々と天に近づく意を核として、月の推移に目をやり、月を見つめる行為がこの歌の新鮮なところではないかと思うのである。月を媒介にして別離後の両者を結びつける発想は、調べる限り、『万葉集』には見当たらない。

ではなぜ、望郷の歌が月に詠み込まれなかったのであろうか。故郷を離れ、異国の地に降り立った遣唐使の望郷ととれる歌は、数多く存在する。遣唐使は、舒明天皇二年（六三〇年）から寛平六年（八九六年）までの二六〇余年の間に、一五回渡唐しているが、そのうち、一〇回は、万葉の時代である。つまり、万葉の人々は、一部の人に限るが、中国の文化に触れ、中国的発想が生活に溶け込んでいたわけで、歌に国際感覚が現れることも、自然なことである。それなのに、中国的発想である、月を介して両者を結びつける望郷の歌は一首も捜しだせなかった。それは、なぜなのか。

私は、『万葉集』における「風土」の考え方によるものではないかと推察する。『万葉集』には、「風土」という言葉が二度でてくる。共に、大伴家持の歌で、左注に用いられている。

立夏四月、既に累日を経れども、しかも由し未だ霍公鳥の喧くを聞かず。因りて作る恨の歌二首

①あしひきの山も近きを霍公鳥月立つまでになにか来鳴かぬ

（巻十七・三九八三）

②玉に貫く花橘を乏しみしそのわが里に来鳴かずあるらし

（巻十七・三九八四）

霍公鳥は、立夏の日に来鳴くことを必定す。又越中の風土、橘のあること稀なり。これに因りて、大伴宿禰家持、感を懐に発して聊かにこの歌を裁れり。三月二九日

二月二日に、守の館に会集ひて宴して作る歌一首

③君が行もし久にあらば梅柳誰とともにかわが蘰かむ

（巻十九・四二三八）

右、判官久米朝臣広縄、正税帳を以て京師に入らむとす。よりて守大伴宿禰家持此の歌作れり。但し越中の風土にしては、梅花柳絮は三月に初めて咲くのみなり。

とある。①②の歌は、家持が、七四六年七月、越中国の守として赴任し、初めて迎えた立夏の日に、ほととぎすが鳴くものだが、越中ではほととぎすが来鳴く季節の花である橘が少ないから鳴かないと訴えている。③の歌は、「梅花柳絮」は、春の慶であるが、越中では三月にならないと咲かないという。このように、風流の目を通して越中の風土を見つめ、生まれ育った大和の風土を思い起しているのである。つまり、越中の風土を詠むとき、望郷の念がはたらいているのではないだろうか。私は、望郷を詠むときは、その土地の地理的なものに、文化や風習が合わさり、「風土」の様態を介して表されたのではないかと考える。事実、『万葉集』二〇巻四五〇〇数首中、一二〇〇百余りの地名が登場する。

地理的なものに、自然と人間の相互作用が加わって詠まれることが多かった故に、月を望郷の媒介と認識することがなかったのだろうと考えるのである。

続いて、『新古今和歌集』四首を見ていきたい。⑥の歌は、旅の侘しさから、都を恋い、都を離れたあわれを思い出した歌である。「有明の月」は、陰暦一六日以後で、空にまだ月があるのに、夜が明ける寂しさを伴う表現だが、月に対しての感情が、最も切なく、月も、情も、うっすらと残存するあたりが、読み手に余韻を与え続けている。有明の月そのものがあわれなものであり、月に対して都を思い出した形となっている。⑦は、旅にあってふるさとの人を思いやる心である。懐古の月に類似した、月に、思う人の面影を見る心から発展した羇旅歌である。⑧も、月前の旅心である。月は、鏡に似ており、鏡に顔の映るように映しうるものとの連想から、旅先で、ふるさとの人の面影を見せるよう月に頼んだ意であろう。また、⑨は、ふるさとの月を叙したものである。ふるさとは荒れ果てて、秋の草と露のみになってしまい、その上を、秋の月が照らしているが、月が照らすものが、荒れているから、その光りが衰えて見えるという心である。

『新古今和歌集』の望郷の歌は、月に想う人の面影を浮かび上がらせ、故郷の人を懐かしむ詠まれかたであるといえよう。月を鏡と見て取る歌は、『金葉和歌集』に、

くまもなく鏡とみゆる月かげに心うつらぬ人はあらじな
（太宰大貳長実）

とあり、『夫木和歌集』にも、

ひさかたの空にかかれる秋の月いづれのさともかがみとぞみる
（大納言源経信）

という歌がある。[4] 平安末期には、月は鏡として捉えられていたようである。三日月や半月が鏡として歌われた例はないので、十五夜や

十三夜の丸い形が、鏡に似ているところから、見立てられたのであろう。望郷の表現手段の一つとして、ふるさとに思いを馳せる時、月に故郷を映し出すことが、新しく人々に受け入れられたのだと考える。

さて、『新古今和歌集』の望郷の月四首を、中国的な発想を合わせて、別の角度から考えると、望郷の念を月に詠みこんだ数少ない歌は、主観的な感情で、見立てられた月そのものに、意識がおよんでいる歌だと考えられないだろうか。

つまり、月の中に、想う人を配しただけで、月の背後の景色には、考えが及んでいないのではないかと推察するのである。望郷の月は、長い年月詠まれることがなく、新古今時代になっても、稀覯であったが、その中の望郷の月は、個体としての「月」を眺めたもので、月に面影を浮かび上がらせ、思いを馳せたとしても、結局は、月そのものを愛でた詠み方で止まっているのではなかろうか。中国的望郷思想「月を見れば、相手も必ず月を見ている」という発想には、至ってないと私は思うのだ。

「月」そのものに思いを馳せた日本と、「月」の下の民族に願いを注いだ中国との、文化の相違を感じ取ることができると言えよう。

ところが、『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』を見てきた中で、ただ一首、安倍仲麿の望郷の歌だけは、この見方に当てはまらないのではないかと考える。

三　安倍仲麿と望郷の「月」

安倍仲麿は、万葉の時代を生きた人物であるが、この歌は、『古今和歌集』巻九羇旅歌の巻頭に置かれた歌である。

もろこしにて、月を見て、よみける

あまの原ふりさけ見ればかすがなるみかさの山にいでし月かも

この歌は、むかし、なかまろを、もろこしにものならはしにつかはしたりけるに、あまたのとしをへて、えかへりまうでざりけるを、このくにより又つかひまかりいたりけるに、たぐひてまうできなむとていでたちけるに、めうしうといふ所のうみべにて、かのくにの人、むまのはなむけしけり。よるになりて月のいとおもしろくさしいでたりけるを見て、よめるとなむかたりつたふる。

安倍仲麿は、元正天皇（養老元年七一七年）の時、一六歳で留学生として唐に遣わされ、とどまること三五、六年、玄宗皇帝に仕え、秘書監となり、名を朝衡と改め唐朝に仕えた。孝謙天皇天平勝宝四年、藤原清河が大使として遣わされ、天平勝宝五年五月唐朝に入り、

共に帰国の途に着こうとしたが、その後、仲麿の舟は難航し、幸いにして難風の災いを逃れ、安南に漂着、再び唐朝に戻り、宝亀元年（七七〇）七〇年の生涯を終えたとされている。

この歌は、帰国の際、明州の海辺で、唐国の人が、送別の宴を催し、仲麿を餞別したとき、夜になって月が美しくさし出でたのを見て詠んだ歌と語り伝えられている。

仲麿は、当代を代表する文人とも交友をもち、王維等一流の詩人も別離を悲しむ詩を贈っている。

「月のいとおもしろくさし出たりけるを見て」は、『古今和歌集』撰者の一人紀貫之が、『土佐日記』正月二〇日夜の条に、

廿日夜の月、出にけり。山のはもなくて海の中よりぞ出くる。かうやうなるを見てや、むかし、安倍仲丸といひける人は、もろこしにわたりて、かへりたる時に、舟にのるべきところにて、かの国の人、馬のはなむけし、わかれをしみて、かしこのから歌作りなどしけり。あかずや有けん、廿日の夜の月いづるまでぞ有ける、その月は海よりぞ出ける。これをみて、仲丸のぬし、我くににかかる歌なん歌神代より神も詠給、今は、上・中・下の人も、かやうにわかれををしみ、よろこびもあり、かなしびもある時には、よむとて、よめりける歌、

あをうなばらふりさけみれば春日なるみかさの山にいでし月かも

とぞよめりける。かの国の人、聞しるまじくおぼえたれど、事の心ををとこもじにさまをかきいだして、ここのこと葉つたへたる人にいひしらせければ、こころをやきき得たりけん、いとおもひの外になんめでける。もろこしと此国とは、言ことなる物なれど、月の影はおなじことなるべければ、人の心もおなじ事にやあらむ。

と、仲麿が離唐送別の宴で、漢詩に対してわが国には歌というものがあることを語り、海からのぼる月を見て、歌を詠んだと記している。歌詞の「天のはら」と「青海原」は「海よりぞ出ける」月の実感によって改めたらしく、『古今和歌集』と『土佐日記』の作歌事情の説明は相違する。『古今和歌集』の作歌の事情も、「となむ語り伝ふる」とあり、史実として、仲麿が詠んだとは断定できない。恐らく、仲麿と同じ境遇にあった日本人の嘆きを、代表歌人仲麿に託して詠まれたものと思われる。(5)

また、桜井満氏は『万葉びとの世界』のなかで、「『三笠の山の月』に思いを馳せたのは、安部氏の氏神社における十一月十五日の氏神祭りの夜の月を中心にしたものだったと断定できる」(6)と指摘され、小川環樹氏は、「春日なる三笠の山も『続日本書紀』宝亀八年（七七七）二月戊子の条に、遣唐使らが春日山の下で天神地祇を

拝したという記事があることから、仲麿とそれに代表される遣唐使の人々が、出発に先立って、祈願をこめた春日の神を思い出し、心ひそかに、このたびの渡海にも神助あれと祈ったのではないであろうか。」[7] との指摘もある。この歌は、安倍仲麿伝説の中の仲麿歌であると考えられる。

然るに、安倍仲麿の歌が伝承であろうとも、もし仮に安倍仲麿が、昔見た奈良の都の三笠山から昇った月と、今まさに目に映る月が同じで、故郷を懐かしみ詠んだ歌と仮定するならば、この歌を次のように解釈できないだろうか。

つまり、仲麿が久しく唐土に住んでいた時、常々月を見てはいたけれども、久々にふるさとの日本へ帰ろうと思いたつや否や、この明州の海上に出た月を見て、ふと、三笠の山へ昇った月のことを思い出し、きっと、奈良の都でも、同じ月を見ているのであろうと、詠んだとすると、形式は和歌という、日本のものではあるが、発想は、私が月を見ているならば、必ず、想う相手も月を見ているに違いないという、中国的発想を取り入れた歌と考えることができると思うのだ。

仲麿自身、唐朝に三五、六年仕え、日本人ではあるが、中国的発想が染み込んでいる。安倍仲麿が詠んだと仮定するならば、この歌は、発想は中国のもので、形式を日本の和歌に借りて誕生したものと言えよう。それは、仲麿の思慮の深さであり、日本と中国の掛け橋となった仲麿だからこそ表現できた、言葉の螺旋である。私は、この望郷の歌から、文化の交差と、歌に詠み込まれた日中の思想の厚みを感じるのである。

「月」の下の民族に意識が及び、想いを馳せた中国。「月」そのものに目を向けた日本。望郷の月は、時空、空間に恐れることなく、湧き出てくる心の温かさであるが、時に、その土地に生きた人々の、生活と文化が紛れ込んでいる。時代を追って、望郷の月を見てきたが、風土が醸し出す人民の儚い希求が、詩歌、詞に、色濃く現れていたと思う。望郷に能う積年の願いは、ただ一つではあるが、自然と共に生きる人間の行く手には、振り切ることのできない文化、風俗習慣がある。大地を踏み締め、生きた人でしか生み出せない表現が、当然ある。この表れが、「月」の解釈から僅かでも紐解くことができ、安倍仲麿の歌から、日中の思想の違いを、感じ取ることができるのではないかと考える。

四　日本と中国の望郷の「月」

望郷の月は、極めて少ないものであった。なぜ、日本では、月を望郷の対象として愛でなかったのであろうか。どうして、中国は、望郷の月が多く詠まれたのであろうか。私は、日本と中国の辿って

きた歴史と、文明の相違が、背景にあるのではないだろうかと思案する。

大陸中国は、早くから、内陸の川沿いに文明が発達し、文化や人民の交流が、齎されていた。内陸アジア北部の草原地帯を東西に結ぶ「草原の道」、南の砂漠地帯に点在するオアシス諸都市を結ぶ「オアシスの道」、南方海上を船で往来する「海の道」などの東西交易路は、日本の国土の二五倍もの広域圏で、文明圏相互の接触や、文化の発展を促した。大土地の主権は、滅亡と統一を繰り返し、その都度、社会の変動にあわせて、新しい思想が生み出されてきたのだ。その中で、詩歌は、争いに敗れ、不遇の中に、奔出する情熱や悲痛な苦悩が詩に託されてきたり、俗世間への批判精神が表れていたり、民族の移動という大きなうねりの中で、自然に対する深い洞察が表出されていたり、日本の狭い見地からは、想像できない、生き抜く人間の生命力が、詩歌に木霊している。

さらに、唐詩の最盛期には、科挙制度が定着し、身分の低い者にも、高級官僚の道が開かれていた。このことも、日本との違いであるが、実際には、門閥勢力が強く、才能があっても、科挙の試験に合格できない者や、合格しても官職に就けない不遇な者が多く、正当に才能が評価されない社会に矛盾を感じ、悲憤慷慨の思いを詩に託す表れも数多くある。あるいは、保護者を求めて、遊歴したり、下級官僚として、天下を遊歴したり、様々な経験を積み上げ、詩歌に深みを齎すことも多分に起こりえたことである。即ち、望郷の詩歌を生み出す機会は多分にあったということであり、望郷の心が自ずと湧き出し、古人が自然を深く見つめた先に、「月」があり、その光りに、切ない、儚い、懐かしむ心を重ね合わせても可笑しくはないであろう。

中国の広い大地に視野を傾け、故郷を離れ、一人旅路にあるとき、「月」をいかにして愛でたかは、想像するに余りあるものである。故里の想う人を察する望郷の念が生まれても、それは、自然な流れのなかに沸き起こった感情であると思う。

一方、日本は、文化の中心が、京都に集中しており、人と人の交流も狭い地域に限られたものであった。勅撰集の作者達は、宮廷歌人がおおく、彼らは、京都から出ることはめったに無かったので、自らの狭い領域以外に目を向けることは、ほとんどなかった。それ故に、望郷を詠みこむ機会がなく、物思いの種に望郷はなりえなかったのではないだろうか。視線の矛先も、切り取られた枠の中に限られたものならば、「月」という景物を介して相手を思い描くことが、限度であったろうとも考えられる。だからこそ、歌人は自分の心を見つめ、時間と空間を埋める歌を作り上げたのだ。

また、何世紀にもわたって、中国文化を崇拝し、抗わず受け入れ

てきたが、詩歌に取り入れられた思想、文化は、それぞれの風土に生きる言葉であり、必ずしも、意味が同じではないと思われる。作歌に込められた感情、価値観までは、和歌の中に掬いきれなかったと感じるのである。それは、日中の比較だけではなく、本人の、つまり、当事者の気持ちが、込められている所以である。「月」という景物を眺めても、漢詩的表現と、和歌的表現には隔たりがあるのは、作歌の歩んだ時間の相違である。

さらに、日本語と中国語の違いも考えられる。日本語は音節と語数がばらばらであるが、漢字は一つ一つが一語であって、夫々に意味を持つ。漢字一文字に込められた意匠は複雑であり、和歌三十一文字では、思うところを表現できないと考えた歌人には、漢詩という選択もあり、そこに可能性を探った歌人もいるが、大多数の歌人は、和歌が理想的な長さであり、三十一音節の制限から乗り越えようとはしなかった。『古今和歌集』をモデルとし、用語や主題を踏襲し続けた背景も、「月」に対する思考の延びが見られなかった理由の一つではないかと考える。

おわりに

美意識の表情は、千差万別で、基準など存在しない。だからこそ、そこに衝突があり、衝撃をうけ、自らの姿を証明し続けるのだと思う。「月」の美意識も、国と国の在るべき姿が映し出され、生きている証を、その国の言葉で表した、それぞれの輝きである。月の光の分配は、偏ることはない。しかし、光りの中に生きた古の人々の心は、「月」を通じて、覗き込むことができるかもしれない。日本と中国、互いに重なり合っている部分と、各自の特色を、冷静に見つめ、見分けることは、つまり、自分自身を見つめることでもある。「月」に注目し、望郷の心を見て、流れる風土の美を再構築し、相互の相違点を語ることは、長い歴史を紐解くことにもつながったと感じる。そして、今も変わらぬ「月」を、光りばかりでなく、文学の中で味わうことで、詩歌の深い感情の重みを掬い取れたのではないかと考察する。

焦燥に生きる毎日、時に自分を見失いそうになる。何を求めて生きているのだろうと、不安に陥るときもある。そのような時、自然は、雄大で、ゆっくりとした時を刻んでいる。大地に向かって、深呼吸するとき、大切な生きる力を呼び戻してくれる。当たり前のことに気づかせてくれるものが、自然だと思うのだ。その中には、「月」の光りの温かさもある。儚く、脆い私だけれど、「月」の光りは、優しく、懐かしい。この懐かしさこそまさに、古に詠まれた心である。私もまた、古人と同じ様に「月」に思いを馳せ、願っていたのだ。

年を重ねても、「月」は浮かび、同じ態で照らしてくれる。私も、月を眺めるたびに、当時を思い起すであろう。どこにいても、どのような時も、力強くありたい。月が光りを届けてくれる限り、私も、ゆったりと優しく思いを馳せたいと思う。

注

（1）赤塚忠『漢和辞典』昭和三十八年三月十五日　旺文社。

（2）松浦友久『校注唐詩解釈辞典』昭和六十二年大修館書店。
赤井益久『唐詩講義』平成九年五月一日。
前野直彬『唐詩選』昭和三十八年岩波文庫。
前野直彬『唐詩鑑賞辞典』昭和四十五年東京堂出版。

（3）澤瀉久孝『万葉集注釈』（巻一～十六）昭和三十二年十一月十日
中央公論社。
伊藤博『万葉集釈注』（巻一～巻十二）平成十一年三月二十五日
集英社。
竹岡正夫『古今和歌集全評釈』（上・下）昭和五十一年十一月十日
山本印刷所。
久保田淳『新古今和歌集全評釈』（第一巻～第八巻）昭和五十一年
十月　講談社。

（4）飯田道夫『日待・月待・庚申待』平成三年八月三十日　人文書院。

（5）竹岡正夫『古今和歌集全評釈』（上・下）昭和五十一年十一月十日
山本印刷所。

（6）桜井満『万葉びとの世界』平成四年一月十日　雄山閣出版。

（7）竹岡正夫『古今和歌集全評釈』（上・下）昭和五十一年十一月十日
山本印刷所。

（二〇〇三年　卒業）